慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	東南アジア国際関係という同時代性：松本三郎先生の学問的営為
Sub Title	
Author	山本, 信人(Yamamoto, Nobuto)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.11 (2009. 11) ,p.188- 189
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事：松本三郎先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20091128-0188

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

でも、今の治療を続ければ天寿を全うできますよと言っておられた。その時の縦容たる大人の態度に感服した。いま一度は、池井優さんを交えて三人で二〇〇七年一〇月一五日に交詢社で食事をした時のことである。その時は特別の会合ではなく、旧交を温め、日常生活について語り、また会いましょうということで別れた。これが最後の松本さんとの会合になってしまった。その後何回かお見舞いの手紙を出したが、遂にお会いすることができなかった。

以上、脈絡もなく松本さんとの想い出話を書いてきた。温かい、大きな松本さんと共に過ごした日々が今でも私の心のなかに良き想い出として残っている。

名誉教授　山　田　辰　雄

東南アジア国際関係という同時代性
――松本三郎先生の学問的営為

いまから半世紀前の一九五五年、松本三郎先生は慶應義塾大学大学院修士課程に進学し、日本外交研究の大家である英修道先生に師事なさった。修士課程では中東の国際政治を研究対象としたが、博士課程に進まれるとその関心はインド、中国、そして東南アジアというように、次第に日本に近づいてきた。そして、松本先生は日本における東南アジア国際関係研究およびＡＳＥＡＮ（東南アジア諸国連合）研究の開拓者となった。

そもそも松本先生が学問を志されたころ、東南アジア研究はアメリカで産声をあげはじめたばかりであった。当時の東南アジア研究は地域研究と称され、各国理解に重きが置かれていた。国際関係や外交研究への関心は極端に低かった。それには理由があった。一九五〇年代半ばから六〇年代といえば、国際政治は東西冷戦構造に翻弄されはじめるころであった。アメリカ型冷戦思考は地域研究の志向性を規定した。そんななか他方で、植民地

から独立したばかりのアジア・アフリカ諸国は中立路線を模索し、その動向は後に第三世界という言葉として定着した。

こうした世界情勢と学問世界の動向に、松本先生は敏感に反応なさった。松本先生が終生の研究対象として選択されたのは脱植民地化を図りつつあった東南アジアであり、そのなかでも研究蓄積の乏しかった外交・国際関係であった。松本先生の分析手法は、地域研究的な現場主義でありながら、国際政治学的には融合的なものであった。ご自身の作品で理論的議論を展開なさることはなかったが、国際構造が国家の行動を規定すると考えるリアリズム論と、国家の相互作用の結果として構造が形成されるとみるリベラリズム論という、当時の国際政治学を代表するアプローチを巧みに組み合わせたものであった。その絶妙さは松本先生の東南アジア国際関係研究に遺憾なく発揮された。

松本先生の研究は、現実の東南アジア国際関係の動向をバランスよく、冷静に判断することから生まれた。東南アジアの国際関係は、国際冷戦の影響下における米中ソ日という域外大国との関係、数次にわたるインドシナ戦争という冷戦の熱戦化に象徴される域内冷戦という構造、域内国際関係の磁場としてのＡＳＥＡＮの形成・展開というように変遷を遂げてきた。日本と東南アジアとの関係も戦後新たに組み替えられ、不可分の関係性へ発展するにいたった。松本先生の研究の軌跡を振り返ると、まさに東南アジアを取り巻く同時代的な現象に敏感に触手を伸ばし、的確に分析した作品が連なっている。

元来、松本先生にとって学問的営為と教育とは密接に関連していた。国際冷戦が終焉した九〇年代以降、松本先生は大学行政に忙殺された。そうした状況下（であったからこそ）、松本先生は「アジアの歴史の胎動」について言及されることが多くなった。それはアジア（とその一員である日本）の胎動が世界的な影響力を有するとの予見であった。「アジアの歴史の胎動」があるからこそ、松本先生は「未来からの留学生」という言葉も好んで使われた。この言葉には学問的な裏付けをもった教育思想が凝縮している。松本先生の学者・教育者としての夢と実践、それは日本とアジアの未来を担う次世代のリーダー育成であった。

法学部教授　山　本　信　人